

研究ノート

地域における伝統的行事の機能と 位置づけに関する一考察

— 福島県須賀川市のきゅうり天王祭を例に —

JR北海道 服部 未来子
福島大学人間発達文化学類 初澤 敏生

A study about the function and the positioning
of the traditional event in the region

— A case study of Sukagawa cucumber devas festival —

HATTORI Mikiko, HATSUZAWA Toshio

I 序 論

1 研究目的と研究方法

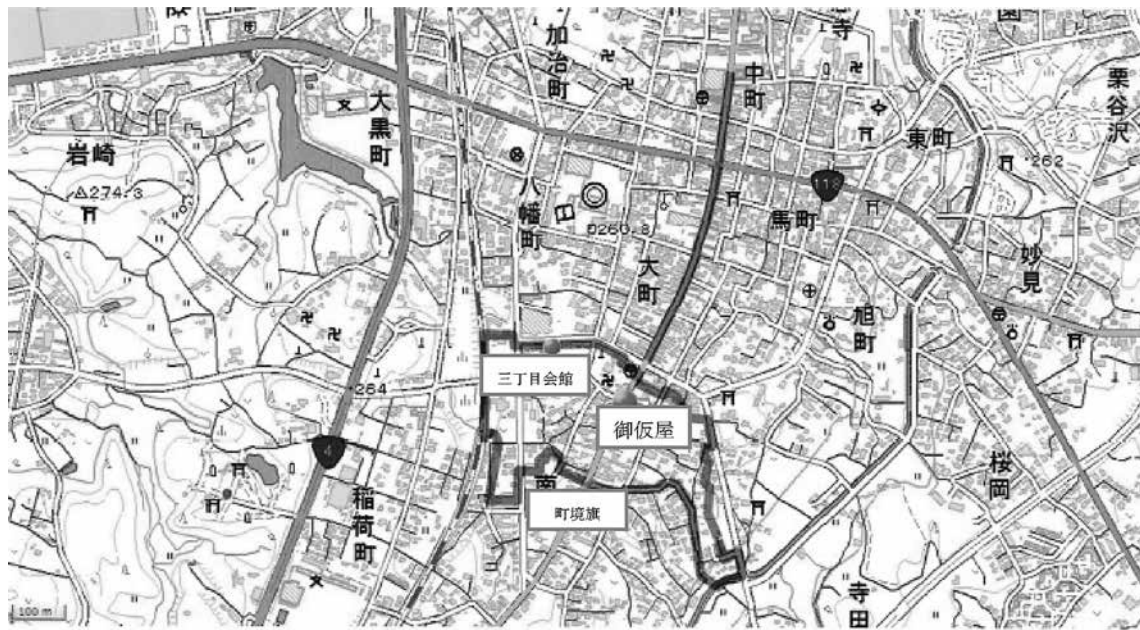
福島県須賀川市は福島県のほぼ中央に位置し、2021年6月現在およそ7万5千人の人口を有する。1889年に町制が、1954年より市制が施行されている。須賀川市内旧三丁目町内会地域では毎年7月13日から7月16日までの4日間にわたって岩瀬神社祭礼、通称「きゅうり天王祭」が行われている（地図1）。「きゅうり天王祭」に類似した「きゅうり天王」「きゅうり天王」「きゅうり天王祭」「天王様」「きゅうり封じ」などの「牛頭天王を祀り、供え物にきゅうりが関係している天王祭」は、岩手県、宮城県、福島県など東北地方を中心に全国各地に点在する。多くは旧暦6月15日に合わせて牛頭天王を祀り、神社境内で祭礼を執り行う形のもので、須賀川市旧三丁目町内会地域で行われるきゅうり天王祭（以下「きゅうり天王祭」）のもととなった牛頭天王社の祭礼も同様のものではあった。

須賀川商工会議所ホームページによると、現在の

須賀川市の「きゅうり天王祭」は、4日間かけて行われ、岩瀬神社から離れた三丁目町内の一角に御仮屋を設け、7月13日に岩瀬彦命の御神体、7月14日に牛頭天王の御神体をそれぞれ神炊館神社より御仮屋内の御神輿に遷宮し、参拝者は14日の宵祭りに合わせて御仮屋にきゅうりを奉納する。また、神社の氏子たちによってではなく旧三丁目町内会の主導できゅうり天王祭実行委員会が組織され、毎年のお祭りが行われている。「きゅうり天王祭」の歴史は260年ともいわれ、旧三丁目町内会地域の中で長い時間をかけて育まれてきた祭りである。しかしながら、その根拠は示されていない。

本研究では、須賀川市の旧三丁目町内会地域で行われている「きゅうり天王祭」を取り上げ、その歴史的背景と祭りの変容について文献と聞き取りから、それぞれ得られた情報を整理する。

また、牛頭天王社祭礼や天王祭に関しては渡辺（1999）、池内（2006）、川村（2007）など多数の研究者によって様々な視点から研究がなされているが、きゅうり天王祭の祭りそのものに関する詳細な研究はこれまでなされてこなかった。そのため、現在



国土地理院地図に加筆して作成

地図1 調査対象地域

注：太線で囲まれた地域は旧三丁目町内会地域を示す
御飯屋から中町方面に伸びる太線は露店が出店する道路を示す。

の須賀川市旧三丁目町内会地域における「きうり天王祭」の保存状況を、詳細な調査記録として残すことを試みる。具体的な方法としては、主催者であるきうり天王祭実行委員会・きうり天王祭露天出店実行委員会・旧三丁目町内会の協力を得て参与観察による実地調査を行い、現在行われている須賀川のきうり天王祭がどのような儀式によって構成されているのか、いつ、どこで、何が行われているかに注目してみていくこととする。

また、主催町内会である旧三丁目町内会全域を対象としたアンケート調査を実施し、主催町内会に居住する住民は「きうり天王祭」に対してどのように関わっているのか、満足しているのか、今を生きる旧三丁目町内会住民にとって不満な点・問題点となっていることは何かを明らかにし、地域コミュニティにおける「きうり天王祭」の機能とその位置づけについて、今後の祭りの存続意義や展望にも触れながら考察を試みる。

2 従来の研究

祭礼研究の基礎を築いた柳田（1942）は、日本の祭の最も重要な一つの変わり目は、祭りの参加者の中に信仰を共にしない「見物人」の群衆が誕生したことであると述べている。見物人の誕生によって本来素朴なものであった祭礼は、農民が「見られる

祭」を美しくしようと心がけ、儀式のいろいろな組み合わせが起こり、ひとつの「まつり」の中に祭礼をはじめとする様々な行事が含まれることとなったとしている。さらに、中世以来、都市民が祭礼を一層華やかにさせたことについても指摘している。森田（1990）は祭りを文化人類学的アプローチの観点から、定期的な儀礼祭りの実施は集団内の秩序の再確認、集団の維持、存続という効果を狙って集団自身、または集団の中心メンバーが企画するものと説明している。個人がどの祭りに参加するかは、どの集団に自己のアイデンティティを求めると同じ意味をもつとしている。そして、アイデンティティを確認するためには他者からの承認欲求の充足が不可欠であることから、祭りは遅かれ早かれ人々を繋ぐ社会的な祭りへと向かわざるを得ないことを指摘している。

また、真野（2001）は祭りへの人々の関わり方について、祭りへのかかわり方には人によって千差万別の立場があると述べている。祭りを執行する立場にある人々にとっての祭りに関し、特に地域の祭りである場合には祭りは地域社会での生活にとって大きな節目となるとしている。また、見物人の役割が祭りの発展に大きく寄与していること、近年では外部から入り込んで、みずから祭りに参加する人々も無視できない存在となっていることについても触れ

ている。岡・初澤（2001）は須賀川松明あかしについて、伝統行事から「つくられた伝統行事」への変化の過程とその要因を明らかにしたうえで、「つくられた伝統行事」であっても人々に自己や地域のアイデンティティを確認させる役割を果たすことを指摘している。

Ⅱ きうり天王祭の概要

1 きうり天王の歴史的背景

きうり天王祭実行委員会・須賀川市三丁目町内会へのヒヤリング（2017年12月）によれば、「きうり天王祭の由来」は以下の通りである。

『牛頭天王』は疫病除けの神様として古くから崇められた。『牛頭天王』のご本尊は市内稲荷町にある朝日稲荷神社境内の岩瀬神社に祭られている。人々は毎年宵祭の7月14日、もともと広大なきゅうり畑のあったという三丁目浦町に御仮屋を建て疫病退散を祈る祭事を行ってきた。天王様にはきゅうりを2本持ってお供えし、一本をもらって帰る。これを食べると病気にかからないとも言い伝えられている。

むかし農家はこの祭りで種子の交換もしたらしく、祭は麦や野菜という夏作物の収穫祭でもあった。天王祭のお祭りまでは、きゅうりを食べない家もあった。

御仮屋へ参拝する途中には、天王様を先導する神、天狗の形相をした「猿田彦」が立つ。宝暦年間が始まりとされるこの祭りは、260年も続いており、年々盛んで毎年6万人もの人出で賑わっている。

須賀川市史などで紹介されているように、かつては『きゅうり天王』と呼んで親しまれてきたが、現在は『きうり天王』と称し、須賀川の夏を告げる一大祭事として市民から広く愛されている。」

この由来がこれまで続いてきた「きうり天王祭」のまつりの様子を描いていることは事実である。しかしながら、この由来は口承によるもので、いつ、誰の手によって作成されたものかは定かではない。そのため、本節においては文献資料を用いてきうり天王祭の歴史的背景について検討する。

① 明治維新以前

『須賀川市史3近世』の岩瀬神社の項目で、文化11（1814）年の『牛頭天王記録帳』（当時南町町内会所蔵、現所蔵不明）には「牛頭天王ノ儀、

例年六月十五日・同十二日道普譜致、御狩屋相立御神輿写置申候、鋳物ハ十三日夜ニ致、同夕濁池迄御迎ニ出候（略）、休年ハ神主壺人ニテ相濟候共渡祭ノ節ハ今壺人相頼申候（略）、右之通りニ相定置申候、尤渡祭之節白川寺御役所願書差出申候（略）、十五日渡祭之節諏訪権社内ニ御休有之候其設人足江酒振舞申候、人足之儀ハ惣町ヨリ都合廿壺人は本町両所へ相願申候」との記述があったことや、安政6（1859）年の『稲荷山牛頭天王御神輿再興寄進帳』（所蔵不明）において、「宝暦（1751-1764）年間にはすでに神輿渡御があったが、明和元（1764）年に火災によって焼失し、その後しばしば仮の神輿を造営して、祭りを執行してきた」と記述があったことが記録されており、少なくともこの地域で牛頭天王を祀る祭事が存在し、その内容は旧暦の六月十二日から御仮屋に神輿を準備し、十三日に飾り付けを行い、同日夕刻に神を御仮屋に御迎えし、十五日には御役所に届け出をしたうえで神輿渡御を行うといった流れで行われていたことがうかがえる。また神輿渡御は隔年で行われ、休年は神主がひとりお祀りを済ませていて、神輿渡御はなかった、ということである。しかしながら、2017年現在、これらの史料は所在不明となっており、原本を確認することはできなかった。

現存する文献の中で最も古いものは、『白河風土記・下巻・卷之十二』である。白河風土記は白河藩主松平定信の命により儒学者広瀬典が編纂したもので、完成は文化2（1805）年である。現存するものは大正元年に刊行された活字本となる。本文中には朝日稲荷社と牛頭天王社に関する記述がみられ、その中で牛頭天王社は、「朝日稲荷ノ社地中ニアリ隔年ニ六月十四日ヨリ十五日迄當町ノ黒門町ノ南木戸ノコトノ側へ假殿ヲ建テ神輿ヲ渡ス其始メノ年曆ハ不詳下ニ録ス諏訪ト隔年ノ祭事ナリ神輿ヲ市中へ渡スハ十五日ナリ」（原文ママ）と記述されている。

このことから、白河風土記完成の1802年以前より牛頭天王を祀る祭事が存在し、その祭事は旧暦六月十四日・十五日に行われ、その祭事では黒門のそばに御仮屋を建て隔年で神輿渡御をしていたという当時のまつりの様子を読み取ることができる。

② 明治維新～第二次世界大戦以前

明治維新後の資料としてまず挙げられるのは『岩瀬郡誌』である。『岩瀬郡誌』は1911年に福島県が掲示した郷土誌編纂要項の訓令により編纂された郡誌で、1911年から1919年までの8年で完成に至ったものの、当時は刊行に至らず、その後1922年に増補したものが刊行された。このうち「第三節 休日制度及び労働上の習慣」で休日とその月日または季節、その行事の概要が記載され、天王祭一祭日六月十五日の記述がみられる。行事の概要は、「即ち山城八阪神社及び尾張津島神社（共に□□牛頭天王）の祭日なるを以て祠宇の有無に拘らず之を祀り且胡瓜を献ずるを例とす又土用餅と称する私典を挙げ近親等を招饗する者多し」（原文ママ）と記されている。

また、1912年に須賀川町郷土史編纂委員会によって編纂された『須賀川町郷土誌・下巻』の「六月」には「六月十五日ハ二丁目、三丁目ノ天王祭ニテ御神體ハ旭ヶ岡稲荷神社境内ニ祀リアルヲ二丁目ニ仮屋ヲ建テ之ヲ移シテ祭りヲ行フナリ人々胡瓜ヲ上ゲテ拜ス本位アゲテ一本他ノ胡瓜ヲ戴ク習ヒアリ『天王祭ヲ拜シテ胡瓜ヲ戴ケバ疫病ヲ免ル』ト唱ヒ人出ノ多ク奉納ノ胡瓜萬ヲ以テ算フト云今ハ七月十五日ヲ以テ祭日トセリ」との記述があり、祭日が7月に変わったことがはじめて明記されている。

また、大正時代の『須賀川町割図』（原本は須賀川市博物館蔵、一部複写は須賀川市図書館蔵）からは当時の須賀川町の様子を見ることができ、当時の本町三丁目（現在の旧三丁目地域）の周辺には拓けた田んぼや畑は描かれておらず、須賀川町内に描かれている田んぼあるいは畑らしきものについても何を栽培しているかは具体的に読み取ることができない。現在の由来で言い伝えられているような「広大なきゅうり畑」が旧三丁目地域の近くに存在していたとは確認できない。

これらの明治時代から大正時代にかけての文献での記述内容を整理すると、明治維新以前の天王祭とは異なる部分が浮かび上がる。

第一に、まつりの呼称についてである。牛頭天王を祀る祭事を天王祭あるいは胡瓜天王と呼称し、きゅうりを奉げるようになったのは明治期であることが明らかとなった。また、「きゅうりを供えるお祭り」という認識が浸透していったのはこの時期であることが記録から読み取ることがで

きる。

第二に、祭日である。旧暦6月15日と定められていたが、明治改暦での太陽暦採用をきっかけとして、祭日は一か月遅れの西暦7月15日に変更された。しかしながら明治何年から新しい日取りで祭りを開催することになったのかの特定には至らなかった。

第三に、それまでの時代は牛頭天王の祭りは神輿渡御を中心とする祭事であったものが、明治期にはそれまで行われていたはずの隔年での神輿渡御については記述されていない。

第四に、明治期の記録では信仰、祭礼としてではなく年中行事として天王祭、あるいは胡瓜天王が記録されている。

この背景として牛頭天王が明治維新以降の廃仏毀釈の対象とされたことがある。牛頭天王は日本における神仏習合の神であり、明治維新後の国家神道を中心とする社会においては否定された。明治期以降、天王祭が祭礼としてではなく、「年中行事」として記録されているのはこのためである。この結果、きゅうり天王祭は神事や神輿渡御などを執り行い、祭礼としての形態を整えているにもかかわらず、天王講による「私祭」として扱われてきた。

この四点より明治から大正にかけての時代は、それまで行われてきた天王祭の内容や性質が変容したことで、現在行われている年中行事としての「きゅうり天王祭」が形成された時期であるといえる。

③ 第二次世界大戦後～現在

第二次世界大戦中の記録として、須賀川に疎開していた洋画家・太田三郎（1884-1969）が須賀川に在住していた際の出来事を書き残した『民俗と藝術-東奥紀聞』が挙げられる。太田は、「須賀川年中行事抄」の章で「（旧暦）六月十五日、胡瓜天王のお祭である。常には旭ヶ岡稲荷の境内に安置してある神體を、二丁目に設へた假屋へ移し、胡瓜を供へて祈る。胡瓜三本を持って行って献げて、かねて供へられてをるの、中から一本を受けて帰り、それを喰べると一年中悪疫に罹らないといふ。この日供へる胡瓜は、例年一萬を超えるさうだ。もの堅い家では、胡瓜天王へ供へない前には、胡瓜を食べない」と祭りの様子を綴っている。

第二次世界大戦後も、きうり天王祭は途絶することなく継続した。『須賀川市史 現代2』には1969年に福地朱実氏によって行われた、露店出店状況の調査記録が示されている。これは露店出店に関する最も古い情報であり、「高度経済成長とともに宵祭りの規模がどんどんと大きくなっていったと思う」という旧三丁目町内会の高齢者の証言と合致する。露店街は御仮屋から須賀川市街地方向に伸びていったため、宵祭りの空間は従来の町境から町境までではおさまらなくなり、旧三丁目町内会地域を超えて広がった。このことは宵祭りの大規模化・きうり天王祭の大衆化を示している。この時期、きうり天王祭は「三丁目天王講」によって取り仕切られていた。三丁目天王講を構成していたのは旧三丁目町内会在住の若い男衆によって構成された青壮年会であった。

平成になってからの「きうり天王祭」は、法律の制定や改正に大きく影響を受けている。

ひとつは、1990年に公布され、翌年3月1日から施行された「暴力団員による不当な行為の防止等に関する法律」通称「暴力団対策法」である。この施行により、それまできうり天王祭の運営を一任してきた組織である三丁目天王講は、暴力団排除への協力体制を整えるために「きうり天王祭実行委員会」「きうり天王祭露天出店実行委員会」へと組織の見直しを行った。もうひとつは、建築基準法の改正によって御仮屋建てと御仮屋取りほぐしのために足場の設置が義務付けられたことである。昭和の時代までは御仮屋建てと御仮屋取りほぐしは旧三丁目町内会地域住民自身の手で行われていた。ところが、法改正によって御仮屋が高さの基準を上回ったことから、足場設置と組み立てを外部の業者に発注せざるを得なくなったのである。そのため、現在では住民は御仮屋建てと御仮屋取りほぐしという名目で、御仮屋の資材の出し入れを行う。

また、2011年3月11日に発生した東日本大震災も祭りに変革をもたらした。神炊館神社の宮司によれば、東日本大震災の発災以前は牛頭天王の御神体を神炊館神社で、岩瀬彦命の御神体を朝日稲荷神社で、それぞれ管轄していた（いつの時代からなのか詳細は不明であるが、少なくとも先代以前からであるという）。そのため、神事についても神炊館神社と朝日稲荷神社の神職の両者によって執り行われていた。しかし東日本大震災により、

岩瀬神社の管理と岩瀬彦命の御神体のお預かりを引き受けていた朝日稲荷神社は倒壊し、甚大な被害をこうむった。朝日稲荷神社を管理していた神職は鏡石の神社に移動し、朝日稲荷神社は無人の神社となった。このことにより、かねてより牛頭天王の御神体をお預かりしていた神炊館神社が、岩瀬彦命の御神体も併せてお預かりすることとなった。東日本大震災以後の「きうり天王祭」における神事は、牛頭天王と岩瀬彦命の御神体二柱をお預かりしている神炊館神社と、朝日稲荷神社に代わり御嶽山神社（隣接する旧二丁目町内会（現大町町内会）地域にある）の神職によって行われることとなり、今日に至っている。

2 現在の「きうり天王祭」

2017年6月の準備段階からおよそ1か月間、きうり天王祭への参与観察および実地調査を行った。以下はその記録である。

① 実行委員会組織について

きうり天王祭は、きうり天王祭実行委員会ときうり天王祭露天出店実行委員会と旧三丁目町内会の相互協力によって運営がなされている。きうり天王祭実行委員会は、きうり天王祭実行委員長一名、きうり天王祭実行委員会副委員長一名によって構成される「実行委員会代表」のもとに、庶務会計担当、祭事担当がそれぞれ置かれる。これらの役職は旧三丁目町内会の要職者が務め、実行委員会代表はきうり天王祭に関わるあらゆる会議に出席し、取りまとめを行う。庶務会計担当はきうり天王祭に係る予算策定・決算報告・会計管理を担当する。

旧三丁目町内会は、きうり天王祭の実行部隊として祭りを運営していく。隣組組長会、評議員、親寿会、青壮年会、女性会、こども育成会、町内会会計、町内会副会長、猿田彦でそれぞれ担当する仕事異なる。隣組組長会は、その年の隣組の組長によって構成される。事前集金、御仮屋組み立て・取りほぐしを担当する。協議員は青壮年会、こども育成会などで過去に役職を経験した者や嘱託員、現職の青壮年会長、こども育成会会長、女性会会長で構成され、全員が祭事委員を兼ねる。委員は2017年12月現在16名であり、委員の大半が町内在住歴の長い高齢男性である。親寿会は役員や評議員、青壮年会やこども育成会、女性会を引

退した高齢者によって構成され、御護符づくりを手伝う。青壮年会は、うちわ集めや警備関係、御神輿担ぎ、御仮屋でのきゅうりの受け渡しなど祭りの花形として活躍する。年齢制限はなく、未婚であることまたは子どもが成長してこども育成会を抜けている三丁目町内の成人男性であることが条件である。青壮年会長は旧三丁目町内会の祭事委員長を兼ねており、まつりごとや神輿渡御のリーダーを務める。女性会は三丁目町内で子育てを終えた世代の女性で構成され、祭礼期間連日行われる直会のために、ご飯の支度や会館の片づけなどを行う。こども育成会は三丁目町内の高校3年生までの子どもとその保護者が対象。主に小学生までがこども行列をなす。中高生の男子だと親に連れられて青壮年会に混ざり、神輿を担ぐ人もいる。保護者は子ども行列の誘導や屋台の運営などを行う。このほか、町内会会計は御初穂の返礼や菓子券の取りまとめを行い、市の嘱託員・町内会副会長は旗場や町境旗の管理を行う。猿田彦は神職を御仮屋や三丁目会館まで案内したり接待したりする祭礼期間限定の役割である。文献には猿田彦の存在が確認されず、いつごろからこのような役割ができたのかは不明であるが、町内会長をはじめとする町内の重役を担う者は皆若いころに経験したという。町内の成人男性から毎年一人、青壮年会の話し合いによって選出される。基本的には毎年新しい人がつとめるが、適任者がいないなどの理由で例外もあり、その場合は長くても3年程度である。比較的若い人が務めるが、年齢、婚姻の有無、子どもの有無について規定は設けられていない。

きうり天王祭露天出店実行委員会は、須賀川市の生活部、観光交流課、須賀川商工会議所、須賀川警察署の刑事課、交通課、須賀川消防署、市内飲食店組合、県南祭礼商業協議会、大町商店会、本町商店会、株式会社セイフティ警備保障、福島交通株式会社などによって構成され、6月から複数回にわたって関係機関打ち合わせを開催する。14日宵祭りでの露店出店に関する区割り、取り決めなどの準備から当日の交通規制やパトロール、露店の安全点検を担当する。

② 「きうり天王祭」の準備期間について

5月頃から旧三丁目町内会の青壮年会メンバーが市内の企業から広告協賛（うちわ）を集める。

集めるうちわはおよそ1万枚強である。青壮年会メンバーのひとりによれば、うちわ配りが始まったのは1975年ごろであった。ヤクルト販売店の重役と当時の青壮年会長が知り合いだったことがきっかけで、元々あった子どものいる家庭に菓子券を配り、菓子交換を行う慣習の菓子が駄菓子から乳酸菌飲料に変更になった。その時に町内会がヤクルトの販売店から乳酸菌飲料を購入するかわりに、ヤクルトが広告協賛（うちわ）を出した。これが後に市内の各企業から広告協賛を集めることにもつながっている。

6月13日15時、三丁目会館にて関係機関打ち合わせ会議が行われた。この会議は15日のきうり天王祭露天出店実行委員会会議のための事前打ち合わせが主であった。

6月15日13時、須賀川商工会議所にてきうり天王祭露天出店実行委員会会議が開かれた。出席者はきうり天王祭実行委員会会長、副会長、須賀川市役所生活部・観光交流課、大町商店会、本町商店会、須賀川警察署交通課・刑事課、県南祭礼商業協議会、警備、須賀川商工会議所であった。

1990年の暴力団対策法の制定・交付によりきうり天王講が解体となり（1999年教育委員会の調査当時は天王講）、その後きうり天王祭実行委員会・きうり天王祭露天出店実行委員会へと主催者変更になった。天王講時代は私祭であったが、現体制になってからは須賀川市の商工会議所が加わったことにより現在、暴力団排除への協力謝礼金として商工会議所からきうり天王祭実行委員会へは助成金（50,000円）が支払われている。

6月17日19時、三丁目会館にて三丁目きうり天王祭隣組長会議が行われた。1組～24組（4・15・20・21組は欠番）の計20組の組長が集まった。実行委員会から隣組長に対し、本年度のきうり天王祭の実施についてのお知らせと、きうり天王祭協力費（町内会費2か月分・1,200円）の集金のお願いの申し入れが行われた。

7月9日10時、三丁目会館にて御護符づくりが行われた。御護符は袋に米粒をスプーンひとさじ入れ、封をしたもの。御仮屋にてきゅうりを2本奉納した参拝者に対し、きゅうり1本とうちわ、御護符をセットでお渡しする。御護符は評議員と親寿会で約3,000袋作成。同日16時半より青壮年会とこども育成会による軒花売りが行われた。旧三丁目町内を一軒一軒まわって軒花を売り歩く。

軒花は3本で500円、オブションの金色の飾りをセットにすると1,000円で販売される。一種の寄付金集めである。

同日17時半、事務所開き（直会）が行われた。きうり天王祭実行委員三役、評議員、女性会が同席。女性会は食事の支度を行う。近年は事務所開きを日付にこだわらず祭礼期間の直前の土曜日、日曜日に済ませることが多いという。

③ 現在の「きうり天王祭」の祭礼期間について

7月13日より本格的な祭礼期間が始まる。早朝5時より太鼓巡回が会長、副会長によって行われる。御仮屋立て集合の為に会長の運転する軽トラックが町内をまわり、副会長は荷台に乗りこんで太鼓をたたいて町内住民へ起床を促す。5時30分より各隣組の代表が御仮屋前に集合し御仮屋立てを行う。前日に業者が足場を組み立てているので、御仮屋の建設に必要な資材や道具を町内会所有の小屋（□□33年7月9日建造との記載あり）から東北電力須賀川営業所前（南町黒門跡）広場へ運び出す。同時進行で神輿（年号等の記載なし）も消防団屯所前へ移動し、台座に乗せて担ぎ棒をとりつける。神輿の台座には「昭和7年7月 工人山岸栄太郎」と記されている。また、町境旗、旗場の設置については、町境に町境旗を2本と黒門付近に幡場を二か所置き、旗・笹・ちょうちんを飾り付ける。この作業は7時を目安に終了となる。

8時から業者によって御仮屋が組み立てられる。少し前までは御仮屋もすべて町内会の住民の手で組み立てていたが、建築基準法などで規制がかかったために足場を組む必要が生じるようになったといい、現在は業者に外注して組み立てを行っている。現在の御仮屋は宝くじの助成により2009年7月に新調したもので、その以前については1922年に神輿を新調した記念の写真が町内会館に現存している。御仮屋の組み立てはおおよそ2時間程度を要する。11時30分頃より神輿を完成した御仮屋の内部へおさめる。平日の昼間は町内の若い人の多くは勤めで出払っているうえ、役員は年齢的・体力的に厳しいので、東北電力須賀川営業所社員有志の力を借りて移動を行う。その後御仮屋には幕（青白の幕は平成10年7月14日三丁目町内会、正面の奉納幕は昭和26年7月15日の記載）をはり、飾り付けを行う。また、神輿の前に御神酒、

塩、米、野菜、果物、魚、きゅうりをお供えする。（三宝は1933年に奉納されたものと1971年7月に奉納されたものが混在している。）

15時30分より三丁目会館にて女性会（婦人会）がお迎え祭りのためご飯の支度をする。女性会の会長によれば、「祭礼期間中は連日食事の支度を行っているが、皆来られる範囲でお手伝いを頂いている。自分もそうだし、みんなそう。」ということである。

17時より三丁目会館と御仮屋それぞれでお迎え祭りの神事が行われる。大町町内会（旧二丁目）役員2名、猿田彦、きうり天王祭実行委員三役（庶務は三丁目会館の留守番）、嘱託委員、神炊館神社祢宜が同席する。17時になるとまず大町町内会の役員2名、猿田彦、きうり天王祭実行委員三役が三丁目会館へ集合し、大町町内会が接待を受ける。17時20分に大町町内会役員が三丁目会館からタクシーに乗車して神炊館神社へ祢宜を迎えに行き、その後御仮屋へ祢宜を誘導する。大町町内会役員はここまでで退席する。一方、同時間帯に実行委員三役と猿田彦は徒歩で御仮屋に向かう。17時30分頃御仮屋に大町町内会関係者以外の全員が集合する。祢宜が岩瀬彦命の御神体を神輿へうつす「御霊移しの儀」が執り行われる。祢宜はマスクをして御神体に自分の息がかからないようにしている（厳密にはマスクをしている最中にお話をするのもご法度で、かつ、御神体は何重にも布でくるまれているとのこと）。その後、御祓いを行い、御祈祷をしたあとに二礼二拍手一礼し、御仮屋を離れて三丁目会館へ移動する。17時45分になると御仮屋での神事に同席した全員が三丁目会館一階大広間へ集合し、先程と同様に御祓いを行い、御祈祷をし、二礼二拍手一礼を行う。17時50分に実行委員三役と猿田彦が祢宜を接待する。

19時よりお迎え祭の神輿渡御が行われる。青壮年会を中心とする10代～中年の町内男性らが神輿の担ぎ手を担うのだが、人手不足のため町内の人間に呼ばれた町外の男性、隣接町内会である四丁目町内会の男性らも神輿担ぎに応援として参加する。全員で御仮屋の中に奉納された神輿を外に出したあと、御神酒をいただき、その後御仮屋から本町交差点まで行って御仮屋に戻り、町境旗のある美容室まで行き、御仮屋まで引き返す。このルートはパトカー、青壮年会長、神輿、こども行列の順に並んで練り歩く。途中の休憩はなく、まっす

ぐの大通りを往復するのみである。Uターン地点で神輿を揉む。最後の美容室（町境旗）から御仮屋まで走って御神輿が戻ってきたのち、神輿は再び御仮屋の中に奉納される。神輿渡御の参加者に聞き取りを行ったところ、神輿の練り歩きルートは年々短くなっていて、神輿渡御自体が形式的なものになっていることがわかった。現在の役員の方々が小学生の頃は、神輿は御仮屋を出発して須賀川駅まで行き、その後同じ道を通って御仮屋を通りすぎ、旭ヶ丘公園内朝日稲荷神社の境内にある岩瀬神社まで渡していたため、岩瀬神社から御仮屋に神様をお迎えするというで「お迎え祭」といったのであろうとのことであった。また、こども育成会の子ども行列は「きゅうり天王祭」と書かれた旗を持ち、御仮屋から本町交差点まで行ったあと御仮屋まで引き返すルートを神輿の後ろについて練り歩く。お迎え祭と同時間帯に菓子券引き換え受付を設置する。庶務会計と猿田彦は三丁目会館にて留守番をつとめており、女性会は20時からの直会のために食事の支度を行っている。この時はさまざまな役割が同時進行で活動している。

20時から三丁目会館にて打ち上げ（直会）が行われる。きゅうり天王祭実行委員会三役、協議員、猿田彦が三丁目会館の1階で宴会（直会）を行う。その他神輿担ぎ・こども行列に参加した人は2階で宴会を行う。これで祭礼期間の1日目は終了する。

7月14日は8時より三丁目会館に女性会が集合し、前日の宴会の後片付けを行う。直会に立ち会った男性陣は誰一人片づけには参加しない。9時40分より三丁目会館、屯所前広場にて宵祭り準備に取り掛かる。こども育成会、青壮年会が中心となり、三丁目会館から宵祭りに必要となる荷物を運び出す。青壮年会は消防団第一分団屯所前に警備本部を設置する。その後、警察署・商工会議所に通行止めに必要な標識が置いてあるのでそれらを取りに行き、指定の場所に設置を行う。10時に御仮屋の再準備にとりかかる。御仮屋前の「せいしゅうや」で一晩預かってもらっていたお供え物をもとに戻す。お賽銭箱の設置と御護符（御供米、中の米はコシヒカリ）、うちわを参拝者に受け渡すための準備を合わせて行う。

現在の参拝の仕方としては、参拝者は胡瓜二本を供え、二礼二拍手して鈴を鳴らし、お賽銭を入

れる。青壮年会のきゅうり交換担当者は参拝者へお返しに胡瓜一本、御護符（御供米）一包、うちわ一本をセットにして参拝者にお渡しする。はやい人は早朝からきゅうりを供えにくるので、その都度対応する。最初のお返しのきゅうりはお供えしてあるものの中からお渡しする。きゅうりはなるべくまっすぐして形の良いものを選別して、まがっているものなど見栄えの悪いものは渡さないように気を付けるのがルールである。

13時より宵祭り開始となり、県道355号（須賀川―二本松線）に通行止めが敷かれる。御仮屋では青壮年会がローテーションを組んできゅうり交換など参拝者への対応をする。御仮屋には上れる人と上れない人がおり、喪中の期間の人は御仮屋の上には上がることができない。また、決まりがあるわけではないが、慣習として基本的には女性も御仮屋には上がらない。また、屯所前テントではこども育成会が焼きそば、フランクフルト、かき氷、手ぬぐいなどを販売する。御仮屋前テントでは女性会が赤飯、参拝用きゅうり、餅の販売を行う。売り上げは後日全額社会福祉協議会に寄付される。16時20分より御仮屋にて御霊移しの儀を行う。猿田彦、神炊館神社祢宜、御嶽山神社宮司が担当する。神炊館神社祢宜が牛頭天王の御神体を御仮屋の中に安置した神輿の中におさめる。

17時より三丁目会館にてきゅうり天王祭実行委員会三役、猿田彦、神炊館神社祢宜、御嶽山神社宮司、隣接町内会、来賓が参加して宵祭りの直会が行われる。その後、18時頃からきゅうり実行委員会三役、猿田彦、神炊館神社祢宜、御嶽山神社宮司が御仮屋に戻って御祈禱を行う。参拝やきゅうり交換がなされている中で神事を執り行う。神事の流れとしては、御仮屋の上にあがって神炊館神社祢宜が太鼓を鳴らし、御嶽山神社宮司が礼をし、祝詞をあげ、再度礼をし、御祓いを行う。この時、御神体だけでなく参拝者に対しても御祓いを行う。神炊館神社祢宜も礼をし、祝詞をあげ、再度礼をする。そして、神炊館神社祢宜と御嶽山宮司が同じ祝詞を読み上げ、御祈禱をする。そして、旧三丁目町内会の代表が御仮屋にあがり、二礼二拍手一礼をする。18時30分より宵祭り参拝者への御祓いのために猿田彦、神炊館神社祢宜、御嶽山神社宮司が周辺をまわる。参列者列を一周したあと、もう一度戻って御仮屋周辺にて参拝者を御祓いする。神職らは軽い接待を受けたあと、猿田彦によっ

てそれぞれの神社に送り届けられる。参拝者は絶えることなく、21時頃にはうちわや御護符が不足する。その際はきゅうり1本のみお返しすることとなる。

21時に露店は営業終了となり、22時の通行止め解除に向けて片づけをする。22時の通行止め解除に伴い、青壮年会が標識などをそれぞれの場所から回収し、警察署へと返納する。これで祭礼期間の2日目、宵祭りは終了となる。

7月15日は朝6時より、旧三丁目町内会住民の有志によって御仮屋から露店があった大通りのゴミ拾いがなされる。

9時25分から御仮屋にて本祭りが執り行われ、きょうり天王祭実行委員会三役、町内会副会長、猿田彦、神炊館神社祢宜が同席する。まず御仮屋の上にあがって御神体が奉納されている神輿の前に出て二礼し、祢宜が祝詞をあげたあと、二礼二拍手し、同席している人たちに対して御祓いを行う。その後再度二礼し、祝詞をあげる。代表に合わせて全員で二礼二拍手を行ったあと、祢宜が御神体二柱を取り出して祢宜と猿田彦は神炊館神社へと戻る。他の同席者はお供え物を片づける。本祭りは10分程度で、形式的なものである。11時30分になると、午後の業者による御仮屋解体と夕方のお送り祭りに備えて神輿の装飾品を外し、御仮屋から屯所前へ出す作業を行う。13時より評議員、猿田彦が三丁目会館にてお賽銭勘定を行う。宵祭り翌日が土日祝日の場合は須賀川信用金庫が営業しておらず、翌日御日待での決算報告に間に合わないため、手作業でお賽銭を数える。宵祭り翌日が平日の場合は須賀川信用金庫の窓口を持っていく。午後は業者によって御仮屋が解体され、足場も撤去され、13日朝の状態へと戻される。16時より三丁目会館にてお送り祭後の食事の準備を女性会が行う。19時から青壮年会、こども育成会の大人たちが消防団屯所前に集合し、御神輿を担いで練り歩くお送り祭を行う。お送り祭もお迎え祭同様に隣接町内会の若者が手伝いとして参加する。20時より打ち上げ（直会）が三丁目会館にて行われる。神輿渡御に参加した人、役員などが参加する。祭礼期間の3日目が終了となる。

7月16日は5時30分に集合し、御仮屋片づけと旗片づけを行う。13日の準備と同様である。8時より女性会が三丁目会館の片づけを行う。10時よりきょうり天王祭実行委員長が御初穂返礼のお礼参

りに向かう。昔は御初穂返礼も猿田彦の役目だったという。17時より評議員、青壮年会、子ども育成会が参加して三丁目会館にて祭りで使用した物品の片づけを行う。18時から御日待（直会）が行われる。きょうり天王祭実行委員会三役、評議員、青壮年会会長、子ども育成会会長、女性会会長、猿田彦が出席する。会長からの挨拶のあと、庶務会計からきょうり天王祭の決算報告と特別協賛金の紹介がなされ、反省会と称しての懇談会が行われる。これをもって祭礼期間の最終日を終える。

祭礼期間の4日間を通して、最も多くの時間や手間が割かれていたのは、食事をする、杯を交わす、そのための準備をする、といった「祭りに関わる人が共に飲食の時間を共有する」直会行為であった。また、幅広い年代のきょうり天王祭はまつりに関わる旧三丁目町内会の住民同士の結束を強化する機能をもっており、コミュニケーションの場として位置付けられているということが出来る。

④ 「きょうり天王祭」の財政的状況について

きょうり天王祭の収支予算・決算については、本研究を進めるにあたり、きょうり天王祭実行委員会から2010年度の予算書と、2013年度から2017年度の予算書ならびに決算書の資料を得ることができた。その決算を示したのが表1である。

表1 きょうり天王祭の決算額（単位：円）

	収入	支出	収支
2013年度	1,001,247	990,157	11,090
2014年度	1,019,654	1,110,970	△91,316
2015年度	1,050,477	1,097,894	△47,417
2016年度	1,042,500	1,094,155	△51,655
2017年度	1,040,074	1,103,293	△63,219

資料：きょうり天王祭実行委員会資料による。

収入を見ると、2013年度から2017年度の5年間で38,827円の増額となっている。2010年度と2013年度以降の決算書を比較すると、大きな違いが2点みられる。ひとつは、支出に関するもので、2013年度以降は「御仮屋建設費」として2013年度は140,000円、2014年度以降は194,400円の支出項目が設けられている。この費用は御仮屋の建設にあたって足場を設けて組み立てを行う作業を業者に外注することに充てられている。2010年度の予算書にこの名目は存在しない。もうひとつ

は収入に関するもので、「特別寄付金」の項目が増設されている。特別寄付金は2013年度以降毎年100,000円組み込まれており、これは各年度の収入の約1割にあたる。この特別寄付金はきうり天王祭実行委員長によるもので、実質的にきうり天王祭実行委員長が自腹を切って「御仮屋建設費」の新設による赤字分を補てんしている形となっている。

この他の特徴としては、収入の部に設けられている「きゅうり益金」がある。これは、宵祭りで参拝者によって御仮屋に供えられたきゅうりを翌日市内の食品加工業者に売ることによって得られる収入である。食品加工業者が引き取るきゅうりの量は、30キロの米袋にきゅうりを詰めたもの20～25袋分におよぶ。

収入で最も大きい割合を占めているのは「各事業所の協賛金」である。これは、旧三丁目町内会の青壮年会メンバーが須賀川市内の事業所においてにまわって得た協賛金である。その対象は旧三丁目町内会内に限定されない。各事業所協賛は毎年300,000円を超えており、毎年収入のおよそ3分の1を占めている。次に大きいのは町内協力金であり、町内会各戸から集められた寄付金によって賄われており、毎年150,000円前後で推移している。このほかに町内会で賄っている収入項目は「町内会補助」であり、町内会費の積み立てから毎年85,000～90,000円支出されている。特別寄付金を除けば、旧三丁目町内会住民によって賄われている収入はこの2項目のみであり、合計金額は250,000円に満たない。残りの収入に関しては、実行委員長による特別寄付金が全体の1割、残りがお賽銭や観光協会、隣接町内会や御日待・直会で寄せられる来賓からの御初穂である。以上のことから、きうり天王祭の財政は旧三丁目町内会地域からの収入のみでは立ち行かないまでに祭りの規模が大きくなっている。

Ⅲ 町内会アンケートの分析

1. アンケートの調査方法

本研究では「きうり天王祭」について、地域住民がどのような意識を持っているか、現状をどのようにとらえているか、また、どのようなかわりを持っているかの3点を明らかにすることを目的として、アンケートを実施した。本アンケートでは、旧

三丁目町内会地域に居住している20歳以上の男女を調査対象者とし、旧三丁目町内会に属している142軒、旧三丁目町内会には参加していないが旧三丁目町内会の区域内に居住している3軒、計145軒に無記名質問紙法による質問紙を配布した。

配布にあたっては、嘱託員の方の協力が得られたため、①町内会の回覧板に回覧資料を挟み込み、②調査票4枚・返信用封筒1枚を封筒に封入したものを戸数分用意し、①②を同時に隣組内で回してもらい、各戸で該当者に記入してもらおう方法をとった。匿名性保持の観点から、直接訪問しての戸別回収を行うのではなく、返信用封筒で回収した。配布期間は9月1日～10日頃（三丁目町内会では回覧板を1日と15日の月二回まわしており、また組によって戸数にばらつきがあるため、配布の完了日は特定できない）、返信期間は9月1日から9月15日頃までとしていたが、返信のあったものはすべて集計対象とした。回収できたアンケートは65軒分、回収率は43.4%、回収できたアンケートの枚数は113枚であった。

2. アンケート集計結果

アンケート回答者の性別は、男性が49人で全体の43%、女性が64人で全体の57%であった。年齢についてみると、回答者数全体のうち60代以上の高齢者が占める割合は、男性では57%、女性では54%、全体では56%となった（表2）。須賀川市平均の高齢化率（2017年 27.1%）と比較して大きな差がある。旧三丁目町内地域は須賀川市の中でも特に高齢化が進行している地域であることが推測される。反対に、20代、30代など若い年代層の回答者数は少なかった。

表2 年代別回答者数

	回答者数
20代	9
30代	14
40代	12
50代	15
60代	25
70代	23
80代以上	15
計	113

資料：アンケート調査による

旧三丁目町内における居住年数については表3の結果が得られた。20代では20年以上居住していると

答えた回答者が7割を占めた。一方で30代では5年未満と回答した人が7人と半数を占めており、このうち5人が後述する子ども育成会へ加入している。結婚や出産、子育てをきっかけに旧三丁目町内に移住してきた人が多いことが反映された結果と考えられる。また、全体をみてみると、20年未満の居住者は25人で全体の22%、20年以上の居住者は88人で全体の78%と長期にわたって定住している人の割合が大きくなっており、対象地域は移動性が低いという特徴を持っていると考えられる。

表3 居住年数別回答者数

	回答者数
5年未満	10
5年以上10年未満	4
10年以上20年未満	11
20年以上30年未満	21
30年以上40年未満	14
40年以上50年未満	10
50年以上60年未満	17
60年以上	26
計	113

資料：アンケート調査により作成

職業については、表4に示した。自営業と回答した9人のうち職場が市内にあるのは5人、残る4人は不明、市外に職場がある人はいなかった。会社員・団体職員・公務員などと回答した41人のうち職場が市内にあるのは9人、市外へ通勤している人は12人、残る20人は不明である。学生と回答した人はいずれも市外の学校に所属している。その他と回答した5人の内訳は、年金受給者、パート、アルバイト、求職中、市内和菓子店の従業員となった。無回答は1人であった。

表4 回答者の職業

農業	2
自営業	9
会社員など	41
学生	2
主婦	21
無職	32
その他	5
N.A.	1
計	113

資料：アンケート調査による

町内会での役割・所属組織については、表5に示した。これについては男女差が顕著である。「所属なし」と答えた人の割合について、全体に占める割合は46%にのぼった。男女別では、女性全体に占める「所属なし」回答女性の割合は52%、男性全体に占める「所属なし」回答男性の割合は39%であった。

また、全体的にみると、20年未満の居住者25人のうち所属なしと答えた人は10人で40%であったのに対し、20年以上の居住者88人のうち所属なしと答えた人は42人で48%であった。本アンケートでは現在の状況について尋ねているため、「所属なし」と答えた人は、①町内会での組織に所属した経験が一度もないというパターンと、②これまでに何らかの役割に属していたことはあるが、各々の事情により抜けたため今は所属をしていないという2パターンが混在していると考えられる。

表5 町内会での役割・所属組織

	男	女
評議員	9	0
青壮年会	7	0
子ども育成会	8	10
親寿会	7	4
婦人会	0	10
その他	3	2
なし	19	33
N.A.	0	3

資料：アンケート調査による。

きょうり天王祭の認知については、知っている112人、無回答1人であった。旧三丁目地域内において、「きょうり天王祭」を知らない人はほぼいないといえるであろう。7月14日の「きょうり天王祭宵祭り」への参加経験については、「きょうり天王祭宵祭り」に行ったことがあるかについては、あるが108人で95%、ないが4人で4%、無回答が1人で1%であった。「ない」と答えた人には理由（複数回答可）を問うたところ、「仕事などが忙しい」2、「興味・関心がない」1、「人混みが嫌い」1、「その他」1であった。

宵祭りではどんなことをしたことがあるか（複数回答可）については、108人の有効回答が得られた。結果は表6の通りである。「御仮屋へ参拝し、きょうりを奉納する」が最も多く、有効回答数に占める割合は70%に上った。御仮屋への参拝やきょうりの奉納は、厳格な作法もなく、手順が簡単なので、小さい子どもや高齢者であっても、御仮屋への移動手

段を確保し参拝列に並ぶことができれば、誰もが参加出来るため、参加経験を持つ人が多いと考えられる。次いで多かったのは「露店などを見てまわる」で有効回答数に占める割合は62%であった。この回答者がもつ参加経験は、祭りの「見物人」としての参加経験である。3番目に多かったのは祭りの担い手としての参加経験を持つ「役員・係として運営に関わる」で、有効回答数に占める割合は44%であった。

表6 宵祭りではどんなことをしたか

役員として運営に関わる	47
御仮屋へ参拝し、きゅうりを奉納する	76
露店などを見て回る	67
露店を出店する	15
その他	9

資料：アンケート調査による。

7月14日の宵祭りを除いた「きゅうり天王祭」について、宵祭り以外に参加したことがあるもの（複数回答可）は表7の通りである。その他については、御護符づくり、隣組の当番、町内会総務などの事前準備や人出・にぎわいの程度見学、が挙げられた。「御仮屋建て」と「御仮屋のとりほぐし」は、毎年各隣組から2人の協力を募っており、この回答を選んだ人の多くが隣組組長の当番が回ってきた年に協力していると回答していた。隣組組長は隣組内での輪番制のため、「所属なし」の人も「御仮屋建て」は男性13、女性15、「御仮屋のとりほぐし」は男性13、女性11と参加の経験が他の項目に比べて多かった。本祭り（15日の神事）への参加経験があると回答した回答者が比較的多かったが、男女別にみると男性28、女性8となっている。慣習的に、女性には御仮屋にあがる役割が与えられていないため、本祭りとは何か別の祭事とを混同している可能性が高い。一方男性についても、原則本祭りに同席するのは実行委員会三役と猿田彦のみであるため、女性同様に別の祭事と混同している可能性がある。どの祭事と混同していたかについては、14日の宵祭りにて夕方御仮屋で行われる祝詞の読み上げ・御祈祷に居合わせたことがある、15日に御仮屋で行われる本祭りを見学してその場に居合わせたことがある、15日に町内会館で御祈祷に居合わせたことがある、などの例が考えられる。

「お迎え祭（13日）」と「お送り祭（15日）」を比

べると、前者は男性27、女性24とそれほど男女差に開きはないが、後者は男性22、女性8と男女で参加経験に3倍近くの差がある。両者の女性参加経験を比較しても前者は後者の3倍となっている。13日のお迎え祭では男性陣が担ぐ神輿のうしろに子ども行列を成して練り歩きを行うため、①子どもの引率・見守りを行っている母親たち（あるいは昔その経験をした祖母たち）②子ども行列は男女に関係なく参加できるため、自分が子供の時に参加したことがある女性たち③町内会館で留守番やご飯の支度をする女性たち、といったものが考えられる一方、15日のお迎え祭では子ども行列がないため、女性が参加する出番というのは原則③以外にないことが、「お迎え祭（13日）」と「お送り祭（15日）」について女性の回答に差が生まれる要因であると考えられる。逆に男性であり変化がないのは、男性には両日ともに役割があり、健康で丈夫な比較的若い男性陣は神輿を担ぐこと、腰痛や加齢などがあっても元気なうちは神輿誘導や交通整理などの役割があること、神輿を動かすには一定程度の人数が必要であるが、町内の人間の人数は限られているため、昔から皆やらざるを得なかったという事情があると考えられる。

参加したことがないと回答したのは13人で、男性2、女性11であった。男性はいずれも所属なし、女性は10人が所属なし、1人が親寿会であった。参加したことのない理由は（複数回答可）、「参加の方法がわからない」3、「仕事などの都合で日程が合わない」10、「知り合いがいないのでつまらない」0、「興味はあるが行きづらい」1、「興味・関心がない」1、「人づきあいが面倒である」2、「宗教上の理由」0、「その他」5であった。その他の理由としては、引越して間もない、高齢、体調不良、配偶者に任せている、が挙げられた。

表7 宵祭り以外の行事参加経験

御仮屋建て	63
御仮屋のとりほぐし	58
お迎え祭	51
本祭り	40
お送り祭	30
直会	20
町内会館でのご飯の支度	17
神事への同席	17
参加したことがない	13
その他	6

資料：アンケート調査による。

参加したことがないと回答した13人のうち、きうり天王祭が4日間かけて行われていることを知っていたかどうかについて「知っていた」と回答したのは6人、「知らなかった」と回答したのは7人であった。また、「参加してみたいと思う」が2人、「参加してみたいと思わない」が10人、無回答が1人であった。

宵祭りを除いた「きうり天王祭」に参加したことがあると回答した人に対して参加頻度を問うた結果は表6の通りである。この項目については83人の有効回答が得られた。宵祭り以外の行事に「今年初めて参加した」と回答した人は0人であった。「ときどき参加している」と回答した人に対して頻度について問うたところ、2年に一度が1、3年に一度が2、4年に一度が1、7年に一度4、8年に一度が3、年数は記述なしでの「組長になった時」が2の回答が得られた。7-8年に一度の答えが多い要因としては、隣組は旧三丁目町内区域に計20組あり一組あたりの戸数は1~16軒と幅があるが、一組当たり6-8軒の組数が多い為であると考えられる。「以前は参加していたが、現在は参加しなくなった」と回答した人に対してその理由を問うたところ、高齢化4、体調不良4、仕事の都合3、子どもが大きくなったから2、身内の介護1であった。また、「B毎年参加している」と答えた47人のうち、町内会での役割について「所属なし」と答えた人は5人、無回答が1人だった。残りの41人については町内会の何らかの組織に普段から属していることが分かった。

表8 宵祭り以外の行事への参加頻度

今年初めて参加した	0
毎年参加している	47
時々参加している	20
以前は参加していたが今はしていない	16

資料：アンケート調査による。

表9 きうり天王祭への満足度

非常に満足している	52
やや満足している	47
やや不満である	6
非常に不満である	1
興味・関心が無い	5
N.A.	2

資料：アンケート調査による。

現在の「きうり天王祭」に対する満足度について問うたところ、表9の結果が得られた。本アンケートの回答者の88%が、現在行われているきうり天王祭に対してポジティブな受け止め方をしている。

満足度を男女別にみると、性別による有意差は見られなかった。また、年代別に見ると、どの年代においても、「Aとても満足に思っている/Bやや満足に思っている」との回答が7割を超えた。一方で、30代から70代にかけては「Cやや不満に思っている」と回答した人が1人以上いた。満足度を居住年数別にみると（表10）、居住年数5年未満では「満足に思っている」か「関心がない」で極端に評価が割れた。5年以上10年未満、10年以上20年未満、20年以上30年未満、30年以上40年未満と年数が上っていくにつれて「不満に思っている」割合は減少の傾向を見せる。40年以上50年未満の居住年数層が最も「きうり天王祭」に対する満足度が高かった。しかしそれ以上の居住年数では、満足に思っている割合は減少していることが読み取れる。

満足度を職業別に見ると、農業を含め、自営業を営んでいると回答した人の中には「不満に思っている」または「関心がない」と答えた人が全くなかったのに対して、会社員・団体職員・公務員などいわゆるサラリーマンとして働いていると回答した人たちの中には「不満に思っている」または「関心がない」と感じている人が1割から2割程度存在するこ

表10 居住年数別きうり天王祭への満足度

	5年未満	5~10年	10~20年	20~30年	30~40年	40~50年	50~60年	60年以上
非常に満足している	5	1	4	7	7	4	12	14
やや満足している	4	2	6	10	5	6	4	8
やや不満である	0	1	1	2	1	0	0	1
非常に不満である	0	0	0	0	0	0	1	0
興味・関心が無い	1	0	0	2	0	0	0	2
N.A.	0	0	0	0	1	0	0	1

資料：アンケート調査による。

表11 所属別きうり天王祭への満足度

	評議員	青壮年会	婦人会	親寿会	子ども育成会	なし	その他	N.A.
非常に満足している	8	3	2	7	8	22	1	1
やや満足している	0	4	6	3	9	21	3	1
やや不満である	1	0	0	0	1	3	0	1
非常に不満である	0	0	0	0	0	1	0	0
興味・関心が無い	0	0	0	0	0	5	0	0
N.A.	0	0	1	1	0	0	0	0

資料：アンケート調査による。

とが特徴的である。

満足度を町内会での組織の所属別に分けたものが表11である。まず、「所属なし」の集団にのみ「関心がない」という回答が集まった。しかし、「所属なし」でも「とても満足に思っている」という評価は4割を超えている。この「とても満足に思っている」という回答が集団を占める割合が最も少なかったのは女性会（婦人会）で、2割強にとどまった。また、評議員は「とても満足に思っている」の回答割合が9割近い。これは評議員が運営の中核を担っていることによって自分たちの考える「きうり天王祭」を実行できているという現状に満足しているということのあらわれではないかと推測される。

3 旧三丁目町内会地域住民にとってのきうり天王祭

旧三丁目町内会がきうり天王祭を運営する実行的な役割を担っていることは事実であり、Ⅱで述べたように現在のきうり天王祭の規模が旧三丁目町内会を中心とする運営組織を超えて大きくなっていることもまた現状である。しかしながら、本アンケート調査の自由記述からは、町内会地域に住む住民は運営の状況が厳しいことへの認識に理解を示しながらも、「続けてほしい」「続いてほしい」といった意見を持っている人が多い傾向がみられた。

また、「市の祭礼にして、負担を軽減してほしい」「祭礼日を固定ではなく土日に合わせて参加しやすくしてほしい」という意見も多数挙げられた。これは、同時期に行われる他の隣接町内会の夏祭りが、町内会の人口減少や人手不足などの事情で、近年、祭礼日を曜日に関わらない固定の日付から土日などの休みの日に合わせた日程へと変更する動きがみられていることや、松明あかしが行政主導で須賀川市の「伝統行事」になっていることを見聞きしていることに影響を受けていると考えられる。その一方で、「旧

三丁目町内会のお祭なので日付は変えないでほしい」「祭礼であり神事なので日付は変えないでほしい」という意見も挙げられた。

Ⅳ 結 論

「きうり天王祭」について、明治から大正にかけての時代に、牛頭天王社の祭礼が胡瓜天王と称されるようになり、それまで行われてきた「天王祭」が「胡瓜天王」へと変容したことによって、今日まで行われている「きうり天王祭」の原形が出来上がった。また、「きうり天王祭」は昭和の高度経済成長期以降、宵祭りの露店の盛況や市内の各事業所からの協賛金の獲得、知名度の向上などの要因によって、旧三丁目町内会地域内から範囲を広げて、隣接町内会を含めた地域コミュニティ、ひいては須賀川市を代表する夏の風物詩としての伝統的な行事へと位置付けられることとなった。

しかし大規模化した「きうり天王祭」は、大きな祭りになってしまったがゆえの課題に直面し、過渡期を迎えていると考えられる。近年の課題としては、「きうり天王祭」の運営に携わる担い手不足・世代交代の困難さが挙げられる。その要因としては、旧三丁目町内会地域内における高齢化の進行、旧三丁目町内会地域在住者の生業の変化、それに伴う生活範囲の広がり、若者の旧三丁目町内会地域外への流出といった地域社会の変化がある。

伝統的行事である「きうり天王祭」は、旧三丁目町内地域にコミュニケーションの場を提供し、地域がまとまるための機会を与え、地域住民にとってのアイデンティティの欲求を満たすことを可能とする場としての機能を持っている。しかしながら、時代の移り変わりによって生じた物事の優先順位の変動や社会構造の変化を鑑みると、その機能は現代の社会生活にマッチ

しない部分があり、機能が十分に生かされているとはいえない。

旧三丁目町内会地域にとって持続可能な「きうり天王祭」とは何か、その軸の取捨選択について考えていくべき時期が迫っていると考えられる。「きうり天王祭」は今や、市内の他の町内会の夏祭りと比べた知名度や宵祭りの人出の動員数において、行政主導の「伝統行事」である松明あかしに匹敵する規模の祭りとなっている。また、地域振興のための「イベント」として育てていくのであれば、須賀川市の特産物である岩瀬きゅうりとの関連づけを強めていくという方向性もある。逆に、旧三丁目町内会住民のための祭りとして存続を、というのであれば、見直しを行うことも必要であろう。

こうした事情を鑑みると、きうり天王祭実行委員会には、長期的な視点を持った「きうり天王祭」の運営が望まれる。やる気のある若者や女性がいれば積極的に祭事委員に起用するといったことや、神輿を担ぐ人を地縁者に限定しないといったことで開かれた伝統行事にすることもひとつの方策であろう。「きうり天王祭」はこれまでも時代の流れに合わせて祭りの在り方を探り、必要に応じて改変を加えながら今日に至っている。守るべき伝統とは何なのか。今、「伝統的行事」として祭りの在り方が問われているように思われる。

参考文献

- 安藤博『ふるさとの祭り——須賀川市——』1976年、高橋孔版社
- 池内泰「神奈川県・江の島における天王祭の成立とその背景——祭礼にみる祭祀空間の考察を通じて——」2006年、『人文地理』第58巻432-452
- 太田三郎『東奥紀聞』1948年、新紀元社
- 岡由記子・初澤敏生「つくられる『伝統行事』——須賀川松明あかし——」2001年、地域社会学会年報13集
- 川村湊『牛頭天王と蘇民将来伝説——消された異神たち』2007年、作品社
- 旧白河藩『白河風土記 下巻』
- 須賀川市教育委員会『須賀川市史1-8巻』1972-2017年
- 須賀川市教育委員会『須賀川市史編集資料第三十五集(須賀川の風本葡)』1984年
- 須賀川市教育委員会『須賀川市文化財調査報告資料民俗文化財調査資料Ⅱ祭礼編』1999年
- 須賀川町郷土史編纂委員会『須賀川町郷土史』1912年

福島県岩瀬郡役所『岩瀬郡誌』、1923年(1972年復刻)

真野俊和『日本の祭りを読み解く』2001年、吉川弘文館

森田三郎『祭りの文化人類学』1990年、世界思想社

柳田國男『日本の祭』1942年、弘文堂書房

渡辺康代「近世城下町における祭礼形態の変容——下野国那須郡烏山を事例として——」1999年、『地理学評論』423-443

「原稿受付(2021年7月29日)、査読なし」